



どっこいしょ

Dokkoisyo



2017.3.9 (木) 第25号

地上の道

～ 希望とは、地上の道のようなものである ～



中学3年生国語の教科書に掲載されている小説に「故郷」という作品があります。作者は魯迅(ろじん)、ルー・シュンという発音になるようです。この小説の登場人物には“しゅんちゃん”として登場しています。

小説が書かれたのは1920年頃、日本は第一次世界大戦が終わり、好景気に沸いているところで、一方、中国は国として非常に不安定な時期であったようです。

仲の良かった二人のおさななじみが20年の時を隔てて再会すると、二人の間には大きな溝ができてしまい、気軽に話すこともできなくなっていたという展開です。“道”という文字は、「まっすぐのびた道」と意味がありますが、この二人の歩んできた道は決してまっすぐではなかったはずで

小説の最後に自分たちそれぞれの子どもたちに向けて、新しい時代の生活について“希望”という言葉が次のように出てきます。

「希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。私たちの経験しなかった新しい生活を。」

そして、小説はこう締めくくられています。

「思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」

今、卒業する皆さんの前にも道が続いています。人がたくさん歩いた道、あまり歩いていない道、これから探していこうとしている道、切り開こうとしている道。どのような道を歩いていくかは、みなさんの覚悟でずいぶんと違ってきます。

道

ドウ、みち、いーう
之(道路の意味)と音を表す
首(シュートウ)(まっすぐ
にのびる意)からなり、まっ
すぐに伸びた道の意味を表す。

今日(3/8・18時)、職員室で卒業文集が配布されました。するとそこにいた先生方が一斉にページをめくり始めました(もちろん他学年の先生もです)。以前担任した子、クラブ員、気になる子…きっと様々な生徒に思いを馳せながら読んだのでしょう。「〇〇君、こんなこと書いてる!」といった声も聞かれました。

「卒業式」という日があるから先生方は頑張れるのですね。」かつて保護者の方が式の後、しみじみとつぶやいた言葉です。その通り、卒業式は毎年生徒の成長に感動します。それは式での凜とした態度であり、決してサプライズやプレゼントではありません。

「式」と名の付くものはイベントではないことを我々の先祖はつける文字によって区別したわけです。明日は立派な式を期待しています。

卒業、おめでとう!
教頭 矢野 毅 吉



「3年生を送る会」より



3月7日(火)の「3年生を送る会」は印象深い会になりました。2年生の生徒会としては初めての大きな行事。企画、準備、調整など非常に大きな苦勞があったことと思います。

当日のスライドやメッセージも素晴らしいものでしたが、各学年の呼びかけと合唱は本当に心のこもった3年生への贈り物になったと感じました。

1年生：スキー実習での成長の証でしょう。力強さとメリハリがあり、一本筋が通っていたように思いました。

2年生：ハーモニーの美しさと伸びやかさは、一日の長があります。次の江井島を背負って立つ学年ですね。

3年生：6クラスという数の多さだけではない、厚みと大きな存在感を感じました。また、呼びかけの内容にも卒業生としての思いが感じられました。

☆記憶に残る名言が生まれた

副会長：「くす玉は割れていません!」

臨機応変な対応と、会場みんながそれを認めてくれている安心感。いい会でした。